

日本語における漢語の意味変化について

—「結構」の続貂—

爨 竹民

Changing Meanings of Chinese Origin Words: Continuing Explorations of the Word "Kekkō"

Zhu Min LUAN

Contrary to the fact that the word “Kekkō” is used in Japanese texts written in characters with the same meaning as in Chinese, in earlier records it not only retained the original meaning, but also gave birth to a new one, that of “a structure or setup” which is absent in Chinese texts. Furthermore, depending on the historical period there were differences in its usage and meaning.

- I. 始めに
- II. 「結構」の読みについて
- III. 中国文献における「結構」

- IV. 日本文献における「結構」
- V. 結び

I. 始めに

漢語の意味変化と言え、和語と同様に多岐に亘るが、意味の幅（増幅と縮小）の変化の他に、ある語がある特定のコンテキストの中で殆ど規則的によい（プラス）意味か悪い（マイナス）意味のいずれかで用いられるケースが存する。一般に意味が「よく」なったのを意味の向上、一方、意味が「悪く」なったものを意味の下落と称する。ここにおいてこの種の意味変化を意味の価値の変化と名付けて考えることとする。

意味が「よい」とか「悪い」とかいうのは主観的なことに絡んでくる¹と言われるが、使用例を中心に考える場合その語の示す対象或いは内容から見て「よい」意味と「悪い」意味のどちらが多く使用され、いずれの傾向性が呈出するのか、から意味の「よい」か「悪い」か判断出来ると思われる。確かに何が「よい」か、「悪い」か、がなかなか判断しづらいが、その語の表出する内容、素材及び時代背景等と共に考えると、やはり意味の向上と下落という意味変化の存在は否定できないのであろう。それは、世の中には人々の行動を内外から規制、制御する社会的規範を基にして生成、慣習化している「よい」「悪い」或いは「どちらでもない」中立的なものといった反

映対象が実在している所以である。語はその社会の表象と投影としての存在である以上、社会に顕在化している「よい」と「悪い」を示すのは言うまでもなく、語義にも「よい」と「悪い」とがあると考えられても妥当で、漢語もちろん例外ではなからう。しかしながら意味の向上と下落という変化が生じた語の多くは、最初はそうだったのではなく、それがいつも同じ意味で文脈において使用されているうちに「臨時的意味」²から「慣用的意味」³に至るという過程を経るものであると推定される。

現代日本語では「結構なお土産」とか「結構なお住まい」とかいうように「結構」は明らかに「立派、優れている」という「よい」意味で用いられている。この点について先行研究は「『結構』という語も建築などの構成について言う動作語であるが、その結構がみごとであるという意味で『結構な』という形容詞としての用法が生じたと考えられる」⁴と指摘している。本稿は「結構」を意味の向上という意味変化の一例として、中国語と対照することによって通時的に考究し、その意味変化のプロセスを解明してみたい。

II. 「結構」の読みについて

この項では、古辞書類などの記述を通して「結構」は漢語であるか否かを確認した上、意味の注釈も考えてみたい。先ず「結構」の漢字表記について触れることとするが、今回調査した両国の文献における「結構」の語形としては二種類が見られた。一つは「結構」の「構」が木偏となっていて使用量が圧倒的に多いが、もう一つは「結構」の「構」が手偏となっており使用量が甚だ少ないようである。つまり「結構」の前部要素は漢字表記一種類のみであるが後部要素は二通りの表記となっており、この二種類の漢字表記については下記の古辞書の記述に依れば分るように木偏の「構」字は正字、一方手偏の「構」字は「構」の異体字、つまり俗字である。「構」と「構」とは正俗関係にあるため以下両者とも考察の対象として扱うが論述に際しては便宜上、正字の「結構」だけを用いることとする。更に引用例の漢字表記に関しては基本的に現行の漢字に改めて書き記すこととした。

構 蓋也、從木耑聲（説文解字） 構 カマフ
字從木也（大般若經抄 25 オ④）

構 俗構字（観智院本類聚名義抄仏下本 51 ⑦）

続いて古辞書と古文献を挙げて「結構」の読みについて考える。

（結）構（世俗字類抄下暈字 41 丁ウ②）

結構（尊経閣善本二卷本色葉字類抄下上暈字 36 ウ②）

結構 伎藝 𠂔 工匠 卜（黒川本色葉字類抄中 99 ウ⑥暈字）

結構 ケツコウ（明応五年本節用集 137 ②）

此地之^{サル}不^{ヨシキ}宜^{コウ} 結構（久遠寺蔵本朝文粹卷五 199 ⑥）

右に列挙した用例から「結構」は暈字として字音読みされて、漢語であることが明らかである。また、『黒川本色葉字類抄』の意味による部分別の分類から当該辞書の成立した時代の日本文献における「結構」は下述したように中国語の本来の意味用法を踏襲しているように思われ、現代日本語のそれと相違していることも示唆される。次に室町時代に編纂された古辞書の「結構」を挙げてみよう。

結構 ケツコウ 奔走義（増刊下学集 57 オ②）

結構 ケツコウ 奔走（図書寮本節用集 21 ⑨）

結構 ケツコウ 奔走（天正十七年本節用集 87 ウ⑤）

結構 ケツコウ 奔走義同（大谷大学本節用集 63 ⑥）

奔走 ほんそう 馳走也（和漢通用集 61 ④）

馳走 ほんそう也（同上 95 ⑥）

花美 くわび けつかうの義 花麗 くわれい同義（同上 259 ⑤）

盡美 じんび けつこうを云（同上 421 ⑤）

寄羅美 きらびらか けつこうの義（同上 376 ①）

その注釈に依れば、「結構」は「奔走」と同じ義を為し、更に「奔走」が「馳走」なりということが分る。つまり、室町時代では前の時代と違って「結構」は「奔走」、「馳走」と類義関係があり、同時に「花美」、「花麗」、「盡美」、「寄羅美」とも意味的に相似通っているように見受けられる。従って「結構」の意味変化について考究に際して「馳走」と「奔走」の意味用法にも留意する必要がある⁵。

以上の考察によって、「結構」は漢語であることが判明した。次項では中国文献における「結構」の意味用法を巡って用例を列挙しつつ検討してみる。

III. 中国文献における「結構」

中国文献を調べたところ、「結構」は韻文、散文などに現われて仏教語出自ではないことが明らかになった。今回管見に及んだ中国文献で最も早期の事例として見えたのは『文選』にも収録されている、漢の時代の王延寿が作った不朽の名作『魯靈光殿賦』における「結構」である。前漢景帝の子である魯の恭王劉余は数多くの宮殿を建造したが、戦火により全てが失われ、ただ靈光殿だけが焼失を免れた。賦はこの靈光殿を詠んだものとされる。南郡の王逸は靈光殿の賦を詠もうと思い、息子の王延寿がかつて魯国に遊学したことがあったので靈光殿がどのような姿であったかと訊ねた。延寿が韻を踏みながら靈光殿の様子を説明すると、王逸は「お前の言葉がそのまま賦になっておる。しかも、わしの力量ではそれ以上のものは作れそうにないよ」と言った。また逸話として後年、蔡邕もまた靈光殿の賦を作ろうと試行錯誤していたが、あとで王延寿の作品を見て大層立派なのに驚き自分の試作は投げ捨ててしまったと『後漢書集解・襄陽記』に記されている。周知の如く『文選』は日本への伝来が古く、人々に愛読されて清少納言に「ふみは文集、文選」と並称されるほど日本文学への影響が大きかった。「結構」という漢語も恐らく『文選』と共に夙に日本語に流入し

たと推測される。

1、於是詳察其棟宇、觀其結構、規矩応天、上憲
翳陬、俯俛雲起（魯靈光殿賦）

文中の「其棟宇」は靈光殿のことを指し、「其結構」はほかでもなく棟宇の「結構」を言う。従って「結構」は靈光殿という建築物の造り、構造、組み立てという意味で用いられている。その組み立てを見れば「能く天文星宿に応じて造られ、高く雲外に聳え衆木錯綜し」と見事な筆致で描いていて、つまり靈光殿の造りまたは組み立ては実に趣向を凝らした素晴らしいものであると称賛することになる。従って「結構」は単なる組み立てというだけではなく、巧みな組み立てによって出来上がったものの善美なる意味合いを包含しているのであろう。次の例は「三都賦」を世に問うたところ「洛陽紙貴」という逸話が生じた左思の詩にあるものである。

2、杖策招隱士、荒塗横古今、巖穴無結構、丘中
有鳴琴（招隱二首）

「巖穴無結構」は隱者の住まいである岩窟には立派な組み立てを為している建物がないと解されるが、「結構」は例1と同義で比喩的に立派な建築物として用いられている。

3、結構何迢遼、曠望極高深（東晋謝朓、郡内高
齋閑望答呂法曹詩）

「結構」は例1と同じく建物の構造の意で、立派さと巧みさを伴っている。次に『抱朴子』に見えた用例を挙げてみよう。『抱朴子』の著者は晋の葛洪で紀元370年頃成立とされる道家の古典である。内篇20巻は仙道を説き、外篇50巻は儒家の立場で世間風俗の得失を論破した。「結構」はその外篇の「勗学」巻にも表われている。

4、文梓干雲而不可名臺榭者、未加班輪之結構也
（『抱朴子』）

文中の「文梓」は木目の美しい梓で「干雲」は大木のことを言い、「臺榭」はうてなと高殿のことを指し、「班輪」は中国古代の名工匠である。「班輪」の「結構」を未だ加えていないため美しい木目の梓の大木と雖も、「臺榭」となることが出来ないと解される。「結構」は「班輪」が「臺榭」を組み立てることを表し、名工匠と素晴らしい材料を併せて考えれば、組み立てられるものは見事で、立派であると推察される。

5、爾其結構、則脩梁彩制、下褰上奇、桁梧複暈、
勢合形離（『文選』何晏、景福殿賦）

「景福殿」は魏の太和六年（232）に魏の都の許昌に建造した宮殿の名である。何晏はそれを讃えるために賦を作った。「其結構」はほかでもなく景福殿という殿宇の木組み、組立てのことを指す。その続文は「其結構」の素晴らしさ、美しさを賛美するもので、「それを観れば、長梁に彩色を施して、下に向かって広がり、上の方は美しい」と解されるであろう。次の二例も同様な意味で用いられている。

6、梁棟宏可愛、結構麗匪遇（韓愈、『昌黎集』二
合江亭詩）

7、結構方殊絶、高低更合宜（姚合、題鳳翔西殿賦）

以上に列挙した「結構」はいずれも名詞として建築物の構造、様式、組立てといった意味で、而も「見事、立派」という意味特徴を具有している。次に挙げる「結構」は名詞ではなく動詞として使用されている。それは日本語に流入した「結構」のサ変動詞としての使用と相通じるのであろう。

8、新亭結構罢、隱見清湖陰、跡籍臺觀旧、気冥
海嶽深（杜甫、同李太守登歷下古城員外新亭）

「結構」は「新亭」を組み立てることを表す。つまり、新しい亭がこの度出来上がって、それが清らかな鵲山湖の南に見え隠れしている。亭の設けられた場所は元からあった臺観のあとにそっくり建てられたものであり、その辺りには雲気が暗くたちこめ遠く海嶽が横たわっている、となる。そこから「結構」された新亭もその周囲の景観も素晴らしいものであると看取される。

前掲した用例から建物を建築するかまたは組み立てられた建築物の構造か、組立てか、いずれにも「建物」に関わるという具象的な意味特徴が見られ、これは「結構」という語の本来の意味合いであると言ってよい。これは前掲した日本語の古辞書『黒川本色葉字類抄』の「伎藝」工匠ト」という意味分類の依拠となる。下記の例は具象性を伴っているものの、建築物ではなく、文章、書などに用いられる。

9、結構文辞、終以諷諫（『後漢書』班固伝）

動詞としての「結構」はその対象である「文辞」の意味から分るように文章を構想したり組立てたりすることを表す。対象は異なったが工夫や趣向を凝らすという点は変わっていない事が以下の事例からも窺える。

10、此『論語』『孟子』較分曉精深、結構得密（『朱
子語類』卷九）

「結構」は後続文の「得密」の綿密という意から

工夫して立てた文章の構造、内容という意味で使われている。次の「結構」は巧に書いた文字の形態、構造の組み合わせといったような意味を示す。

11、又有六種用筆、結構圓備如篆法、飄颻灑落如章草。（『晋衛夫人筆陣図』）

「結構」は書の筆致、形が滑らかで且つ和やかであることを表す。尚、この「結構」について同じ晋の王羲之『題衛夫人筆陣図後』には、結構者、謀略也と注記されている。つまり書や絵等を如何に書くかについて構想、工夫するということを言っているかと考えられるが、次に挙げる例は書などのための「謀略」ではなく、出来事に用いられ、更に一般化が進んだと言えよう。

12、霞寓深怨、遂内外結構、出郴州刺史（唐、李翱右仆射楊公墓誌）

13、今者再責寶參、特縁別有結構、陛下親自尋究、審得事情所與連謀（唐『陸宣公集』十九奏議寶參等官状）

右の例と異なり「結構」と共起するのは建物ではなく、人間の不審な行為となる。上接文の「内外」「特縁」という意味と共に考え合わせると「内外」と結託、「特別な縁」を利用して謀略を巡らすという意味で「結構」が用いられている。それに加えて本来のプラス的な意味特徴を失ってマイナス的な意味合いを随伴してくる。以下の例も同じく使われている。

14、忠言因牛昭容転相結構、事下翰林（宋、孔平仲『続世説・奸佞』）

15、江南反了三鎮、雲南郡太守雍闓、結構不韋城呂凱、又有雲門閩太守杜旗（『三国志平話』巻下）

16、兀那夫人、你豈不知夫乃身之主、你怎生結構奸夫（元曲『争報恩』）

17、他説是你結構的歹人（同上）

以上に挙げた具体例に基づいて「結構」について意味分析を行ってみたところ、中国文献における「結構」の意義は次のように帰納することが出来た。

- 一．建物等を組み立てること。また、建物などの組み立て、仕組み、構造。
- 二．文章や書等を構想すること。また文章や書などの組み立て、形態。
- 三．好ましくないことの結託、企て⁶。

と三つに大別できる。（一）の意義は「結構」の原義であると判定される。それを下地にして（二）更に（三）の意義が生じたと推定され、いわば意義が具象化から抽象化へ傾斜したのである。尚、この

ような変化を実現させたのは三者とも工夫、趣向を凝らすという人間の思考行為という意味特徴を内包していたからと考えられる。更に原義となる（一）の意義を示す「結構」は右の考察を通して判明したように「見事、立派」という意味合いも付随しているが、それは「結構」を構成する前部要素「結」と後部要素「構」の各々に具わっている意味からも察知されよう。例えば『文選』における右記の王延寿作「靈光殿賦」の注に「善曰、高誘呂氏春秋曰、結、交也、構、架也」とあるように「結構」は単に「作る」「立てる」だけではなく、材料などを上手に組み合わせたり組み立てたりする、つまり、工夫も必要なので「結構」したものは「見事、立派」というイメージを伴うのである。但し現代日本語のように「結構」自体が「立派」という意味を示すには至っておらず、更に用法から見ても中国文献における「結構」は動詞または名詞として使用されるのみであるが、現代日本語のように形容動詞としての用法は見られなかった。

IV. 日本文献における「結構」

管見の日本文献を調べたところ、「結構」は和文からはその用例を検出することができず、漢文と和漢混淆文にのみその所在が確認できた。日本文献では「結構」の漢語という素姓のため、文章ジャンルによる使用上の差異が認められたのである。この点についてはその出自となる中国文献と異なる日本文献の特徴とも言えよう。尚、日本文献（奈良時代～鎌倉時代）に於ける「結構」の使用状況は下記の表1の通りとなる。

表1に拠れば、「結構」は、漢文特に日本の諸事情を詳細に記録、反映する所謂和化漢文の古記録類において多用されて使用頻度も高く、書記用語としての常用語とも考えられる。これは「結構」が上記した『色葉字類抄』に収録されていることから察知される。また夙に奈良時代文献に登場し、日本語での使用の早かったことも窺うことができた⁷。使用量から見れば文献の制約などもあって、奈良時代文献での使用量は僅か一例のみであり、次の時代に比して極めて低い。一方、平安時代に下ると使用の量と頻度とも前の時代を大いに上回るようになった。それは当該時代の言語活動が多様化して文献量も大幅に増えたためでもあろうと推察される。更に、鎌

倉時代では使用量はもちろんのこと、使用範囲も前の両時代より圧倒的に多くまた広くなったと言えよう。特に平安時代まで漢文という文章ジャンルで書記用語としてしか使われていなかった「結構」が漢文という世界から離脱して、鎌倉時代に完成期を迎

えたと言われる和漢混淆文に多用されていることは特徴的であり、書記用語から日常語に変容を遂げたかと思われる。このような使用上の変貌は言うまでもなく意味変化をもたらす、不可欠な素地の一つとなったと言ってよからう。

表一

結 構				
用例数	文 献	時 代	文 章 ジャンル	
1	寧樂遺文 <small>所載文章</small>	奈良	漢 文	
1	計			
1	続日本後紀	平		
3	三代実録			
3	類聚三代格			
1	日本紀略			
5	扶桑略記			
1	朝野群載			
1	本朝世紀			
1	古金石逸文			
49	平安遺文 <small>所載文章</small>			
5	東大寺文書			
1	小右記			
1	水左記			
1	兵範記			
1	台記			
1	中右記			
3	山槐記			
1	凌雲集			
1	経国集			
2	本朝文粹 <small>(久遠寺蔵)</small>			
2	本朝文集			
1	法成寺金堂供養願文			
83	計	安		
62	玉葉	鎌 倉 (南北朝も含めて)		漢 文
23	明月記			
7	吉記			
2	猪隈関白記			
14	平戸記			
4	勘仲記			
5	高山寺古文書			
6	高野山文書 (1・4)			
9	百鍊抄			
310	鎌倉遺文 <small>所載文章</small>			
51	吾妻鏡			
18	園太暦			
3	天台座主記			
1	雑筆往来			
4	異本十二月往来			
3	垂髮往来			
1	貴嶺往来			
3	庭訓往来			
2	尺素往来			
1	十二月消息			
2	南都往来			
531	計			
1	愚管抄		和 漢 混 淆 文	
13	延慶本平家物語			
13	(覚一本平家物語)			
14	源平盛衰記			
1	平治物語			
4	正法眼蔵			
1	古今著聞集			
1	沙石集			
3	塵袋			
38	計			
652	合計			

([13] : 重複 13 例を除く、以下同)

IV-1. 奈良、平安時代の「結構」

先ず初出例と思しき奈良時代文献の「結構」の意味について検討してみよう。

1、散金花於玉堂、則梵音揚響、結構之功、誰窮妙於往年（『寧樂遺文』下金石文 979 下⑤）

「結構」は寺を組み立てるという意味で用いられ「結構之功」の「功」から寺を建立したという営為と建立された寺の見事なことを賛美すると解される。つまり「結構」は中国文献と同じ意味として使われ、そのまま受容したと看取される。

以下、平安時代文献に目を転じて「結構」の意味用法について考察を加えてみる。先ず、漢詩文から検出できた「結構」七例を全部取り上げて考えよう。尚、漢詩文に最も早く見られた例は平安時代初期に編纂された三大勅撰漢詩集の嚆矢となった『凌雲集』にある「結構」である。

1、釣臺新結構、浮柱出從深（『凌雲集』483 上⑬）

Cf 新亭結構罷、隱見清湖陰（杜甫、同李太守登歷下古城員外新亭）

用例の上句の構文が参考例の杜甫の詩文と相似ていることから、「結構」も参考例と同じく「釣臺」という建築物を建てる意味として用いられていることが分かる。これは「三勅撰詩集の序文を通してそれぞれの主張を眺め、その主張を示す表現が数多くの漢籍と云う借用物による部分の多いことが明らかになり」「詩集として編纂したことは、やはり中国の文学観に同化した当時の文学観を如実に示すものと云えよう」⁸と指摘されているように、『凌雲集』が中国漢詩文を模範にして作られたことの一投影ともなる。

2、鳳閣將成歲、龍樓結構辰（『經国集』555 下⑭）

「結構」は例①と同様「龍樓」という建築物を構築するという意味で用いられている。上記の参考例と同じ文構造で動詞用法としている。

3、此地ノ之不_不宜_{コト}結構不_レ幾_{コト}遂_ニ遭_フ所_ノ天_ノ之_レ長_ク逝_ル（『本朝文粹』（久遠寺藏）卷五 199 ⑥）（注：両字の「-」音合符、「_」訓合符となるが、以下同）

Cf 疏鑿出人意、結構得地宜（『白氏文集』卷六十二裴侍中晋公以集賢林亭）

例③はこの地で「結構」が宜しからず、対して参考例は「結構」が地の宜しきを得ることとなる。両者は構文といい文意といい類似していると見られ、本例の「結構」は参考例と同じく建物を作り上げる

という意味として用いられている。

4、爰白-黒之衆相-議_キ欲_ス三結-構_ト堂-舎_ヲ（同上十二卷 193 ④）

Cf 結構池西廊、疏理池東樹（『白氏文集』卷八池畔二首）

「結構」はその動作の対象「堂舎」と共起することから参考例の「池の西廊を結構す」の「結構」と同義で、建造するという意味と判断される。尚、用法としては「結構」の右傍に付してある訓からもサ変動詞としての用法が明らかになり日本語化の側面を見せている。

5、華堂結構、不日之功已成（『本朝文集』163 下 ⑨藤原後生補多樂寺修法会願文）

Cf 結構單群崖、廻環馭万象（柳宗元詩法華寺石門精室三十韻）

「結構」はその対象「華堂」を建立するというこゝで用いるが、亦、組み立てる「華堂」の示す意味から見事、立派というような意味合いも伴うようになったと推察される。

6、昼夜時日、種々所作、一々有之、彼皆供養、先畢末起者金堂也、即企大廈之結構（法成寺金堂供養願文治安二（1022）年 271 上⑧）

例⑥は藤原広業が藤原道長の法成寺金堂を供養するために撰述した願文であるが文の「結構」はその連体修飾語「大廈」から、建立するという意味を示すと考えられる。例⑤と同様、大廈を組み立てることから見事、立派という含みも随伴してくるように思われ、本来の中国語のそれを踏襲しているとも言えよう。

7、遂課短毫慙成狂簡、凡二千九百五十言。除重点三十七字、但恥結構是疎、採椽之材不削（『本朝文集』三善為康童蒙頌頌序 238 上⑩）

Cf 結構文辭、終以諷諫（『後漢書』班固伝）

例⑦は右に列挙した6例と異なり参考例と同じく文章のことについて論説されている場面で「結構」は文章の組み立て、構造の意味で用いられている。

以上、平安時代の漢詩文における「結構」の意味用法について考察してきたが漢詩文の「結構」は出自の中国語の意味用法を受容して用いられていることが分かり、この点は右に挙げた参考例からも示唆されている。のみならず、その参考例を通して漢詩文にある「結構」の出所が何処にあるかを彷彿とさせる。亦、漢詩文の「結構」の建築物を組み立てるという意味には中国語と同様「見事、立派」という

ような意味合いが内包されていることも認められる。

次に漢詩文以外の古記録、史書、古文書等に見られた「結構」は如何なる意味用法で使用されるのかについて、具体例を挙げつつ考究を進める。

- 1、則大象之背、結構小臺（『統日本後紀』天長十（833）年 17 ⑩）
- 2、大仏殿第一層上結構柳閣更施舞臺天人天女、彩衣霓裳（『三代実録』貞観三（861）年 73 ⑬）
- 3、件寺（略）元慶元年依太后御願所建立也。今奉仰旨云。結構既也（『類聚三代格』延喜五（905）年 63 ⑥）

例①②③の「結構」は動詞用法として使用場面とその対象「小臺、柳閣、寺」を合わせて見れば同時代の漢詩文と同じく、組み立てる、建造するということを表現していると考えられ、言わば本来の中国語の意味をそのまま継承するという形で用いられている。

- 4、依有本願、籠金峰山之邊、結構一新堂（『扶桑略記』天慶五（942）年 223 ⑤）
- 5、行幸彼寺、結構多宝塔一基（同上応和元（961）年 241 ①）

例中の「結構」は上記の例と変わることなく動詞として「新堂、多宝塔」を建立する意味で用いられているが、その対象「新堂、多宝塔」は立派だけではなく仏教の建築物として神聖なるイメージも伴ってくるのに対し次の二例はその趣を異にしている。

- 6、造一間草庵住之、結構卑微、山木留皮（同上寛弘四（1007）年 267 ⑭）

「結構」は名詞として結んだ「草庵」の構造或いは様式、用材を表すのに用いられているが「卑微」という述語と「草庵」から推して「結構」には見事、神聖であるどころか、寧ろ素朴且つ陋狭な意味合いも込められていると看取される。

- 7、西府倉屋破壊、伐神社之木、充結構之用（『三代実録』貞観三（861）年 69 ⑭）

「結構」は破壊した「倉屋」を修繕するという意味として用いられているが、見事、立派であるような含みは共起しかねる。

- 8、瞻仰遠近七個之精舎、結構今後二世之因縁者（『扶桑略記』天曆三（949）年 225 ⑧）

「結構」はその対象となるものが上記のような建造物と異なり観念的な「因縁」となり、それを結び付けるということを示している。つまり「結構」するものとしては具体的なものから抽象的なものへと

広まったとも言えよう。

- 9、於東寺舍利供養事、別当闍梨結構云々（『本朝世紀』康和五（1103）年 330 ⑧）

ここでの「結構」は動詞用法でその対象が「東寺における舍利供養の事」となり、本来の中国語の建立物や文章などのような物と異なり、事を仕組む、或いは計画するという意味としている。但し「物」であろうと「事」であろうとそれを「結構」するには、いずれも創意工夫を要するという人間の思索行為が不可欠のものとなるであろう。更に言えば事を仕組む、計画することは建築物、文章等を組み立てたりする意味から派生してきたのであろう。加えて「結構」するのは「舍利供養」という出来事から推して決して悪事ではなく寧ろプラス的な事であると見るべきである。下記の例も同じ意味で用いられる。

- 10、七月十五日広大善根之日也、為盂蘭盆善根、奉写法華一品經、令開演演説、報七世四恩併法界之恩云々、爰当寺大檀那大法師寛智心染善根、勤有功德、早肯受結構之（『平安遺文』3851 条）

「盂蘭盆善根」のために「奉写法華一品經、令開演演説」を「結構」する。「結構」は明らかに善たることを計画、支度することを示している。しかし次の例文の「結構」は違って良くも悪くもなく中性的な意味合いで用いられているように思われる。

- 11、（延暦園城興福寺衆徒可奉迎取法皇之由支度云々）延暦寺総大衆不成此議、東光房阿闍梨珍慶結構、又園城寺同結構云々、此風聞之後法印實慶逐電云々、可奉迎取兩院之由結構云々者（『山槐記』治承四（1180）年 45 上①）

例⑪の三つの「結構」は例⑨と同様、仕組む、計画することを示すが「迎取法皇」という事を企てようとするのである。対して下記の「結構」は明らかにマイナス的な意味として使われる。

- 12、横募西金堂威令行珎勝濫惡、皆以頼友結構也、罪科尤不輕（『平安遺文』2432 条）

「結構」はその後続文の「罪科尤も軽くからぬ」と前文の「濫惡」を併せて考えれば、悪事を企てたことを表している。前述した中国語の（三）の意味と相通じるものであると見られるが、次の 2 例も同様である。

- 13、就中東塔一所、殊結構起、欲企狼藉云々、兩山衆徒、一塔結構歟、早加制止、不承引者儘可注進張本也（同上 2622 条）

14、被院宣云、延暦寺西塔衆大法師弁円年来之間、忘善神之冥鑒、為惡夜之張本、山上洛中之濫行、五畿七道之惡逆、十之八九無非彼之結構（同上 3703 条）

二例とも「悪事、濫行」を企て、実施するという意味で「結構」が用いられている。

以上、平安時代文献における「結構」の意味用法について具体例に基づいて分析、検討を加えてきた。「結構」は中国語と変わることなく動詞と名詞として用いられているが、動詞としてそれと共に起する対象は中国語のそれより多様化したように見受けられ、それは「結構」の意味に大いに作用することになるであろう。亦、同じ対象の建築物と言っても中国語のように見事、立派なものもあれば、質素、粗末なものもある。更に中国文献には見られない仏教的対象である「因縁」も認められ、マイナスの対象としては「悪事、濫行」なども挙げられる。右の考察を踏まえて「結構」の意味を帰納すれば、次のようになる。

一、建物等を組み立てること。また建物などの組

み立て、仕組み、構造。

二、文章や書等を構想すること。また、文章や書などの組み立て、形態。

三、好ましくないことの企て、働き等。

四、物事の仕組み、計画。

という四つに分類できるが、残りの平安時代文献に見えた「結構」についても考察を通じて全てそのいずれかの意味で使用されていることが明らかになる。

(一) と (二) は言うまでもなくその出自である中国語のそれをそのまま受け継いだものであると言えるが、(三) と (四) は (一) (二) に内包されている創意工夫を要するという人間の思索、思考行為を下地に派生したものであると考えられ、中性的な出来事を「結構」すれば (四) の意味となり、一方、悪行等のような好ましからぬことを「結構」すると、(三) の意味で用いられる。尚 (三) は前述した中国語の (三) の意味と重なったものであり、それを受容したかと考えられる。以上の意味に基づいて平安時代文献にある「結構」について分類を行うと、次の表 2 のような分布となる。

表 2

計	意味 文献	結 構				文章 ジャンル
		一、建物等を組み立てること。また、建物などの組み立て、仕組み、構造。	二、文章や書等を構想すること。また、文章や書などの組み立て、形態。	三、好ましくないことの企て、働き等。	四、物事の仕組み、計画。	
1	続日本後紀	1				史書・古文書・古記録
3	三代実録	3				
1	類聚三代格	1				
1	日本紀略	1				
5	扶桑略記	4			1	
1	朝野群載	1				
1	本朝世紀	1				
1	古金石逸文	1				
49	平安遺文所載文章	7	2	34	6	
5	東大寺文書	1		2	2	
1	小右記	1				
1	水左記				1	
1	兵範記			1		
1	台記			1		
1	中右記			1		
3	山槐記			3		
1	凌雲集	1				
1	経国集	1				
2	本朝文粹 (久遠寺蔵)	2				
2	本朝文集	1	1			
1	法成寺金堂供養願文	1				
83	合計	28	3	43	9	漢詩文

表2に依れば、先ず言えることは平安時代文献において文章ジャンルによる意味上の差異が見られる。つまり、中国の漢詩文を規範にそれを模倣して綴った漢詩文では、中国語の意味用法を有りのまま継受している。一方、専ら日本の歴史、政治、社会及び日本人の私的な出来事等を詳記した史書、古文書、古記録等においては本来の中国語の意味を踏襲した上で、それを土台に新しい意味が生まれたのである。尚、使用頻度から見れば、(三)の意味としての「結構」は最多量に達して当時代の中心的な存在となっているが、現代語と比べれば意味の向上どころか、寧ろ下落の方向に傾いてしまったことに留意すべきである。確かに(三)の意味は中国語のそれと類似したところも多いというものの、その使用量としては中国語と違った一面を見せている。(三)の意味と異なり(一)の意味は平安時代に亘って各文章ジャンルにおいて満遍なく使用されており、(三)の意味に次ぐ位の使用頻度を有する。他方、中国語には見えず、新しい意味としての(四)はその使用頻度が低く、周辺的な役割を果たしていると思われる。

IV-2. 鎌倉時代の「結構」

鎌倉時代文献に目を転じてそれにおける「結構」の意味用法を巡って考究してみよう。前掲した表1が示す如く、鎌倉時代になって「結構」は漢文に止まらずこの時代に完遂を遂げ、隆盛期を迎えた和漢混淆文にも浸透した。使用範囲は前の時代より拡大したと言って妥当であろう。先ず当時代の漢文における「結構」を挙げてその意味用法を考えてみたい。

- 1、同年戊辰初結構堂奉安置薬師仏像（『天台座主記』568上¹⁷）
- 2、次于神楽岳西吉田社北建立重閣構堂結構数字雑舎（同上579上¹⁶）
- 3、頻結構城郭云々（『鎌倉遺文』24032条）
- 4、起大塔婆之洪基、弘仁以降四五箇度焉、礎石守跡般爾之結構一十六丈矣（同上27428条）
- 5、又左右二尊者夫婦二人之結構也（同上31427条）
- 6、宝塔穿雲、迎万代結構、珠殿承日（同上3752条）
- 7、大将送馬一疋牛一頭、今日、大理於彼亭結構造泉之間、所立之牛馬也（『玉葉』建久二（1191）年七月二十二日条）

七例いずれとも「結構」は「堂、雑舎、城郭、大塔、仏像、宝塔、造泉」等を組み立て、作るという意味で用いているが、次の例は立派な建物ではなく微小化、具体化したものを作ったり調べたりすると

というような意味としての「結構」となる。

8、若干炭竈結構之間（『鎌倉遺文』10518条）のように、炭を焼く竈を作る意味としての「結構」である。

9、桌^{ツカ}、机^{ツカ}、桌^ノ貫^ス差^サ結構^ス云、机^ノ四足斗有也（『庭訓往来』九月状320^④）

「結構」は「桌」と「机」との違いについての注釈文に使用されている。つまり「桌」は「机」と違ったところと言えば、「貫差」を結構するか否かにある。従って、「結構」は「貫差」を設えたり据え付けたりするという意味で用いると見られる。一方以下の「結構」は好ましくない文書を企てたり、作成したりする意味として用いられているが、前述した本来の(二)の意味よりマイナス的な方向へ傾斜している。

- 10、(不顧以前契状) 捧結構偽書、成競望之刻（『鎌倉遺文』19075条）
- 11、院中落書結構之人、必顯其失（『玉葉』建久二（1191）年八月二十九日条）
- 12、爰帯北条御下文之状語、河田入道私領宇佐美三郎可知行云々、而子息と云文字入筆也、是可謂結構之文哉（『鎌倉遺文』44条）

「結構」は、例10で前文にある「以前契約」を顧みずに「偽書」、例11で「落書」、例12で偽造の文書を作成したということを示している。以下の例は単に建築するだけではなく、その計画も含まれているように看取される。

- 13、東大寺大仏御身雖全、御首焼損遠近見聞之輩、莫不驚眼、雖如形可造掩仮仏殿之由、寺僧等、欲結構之処（『玉葉』治承五（1181）年閏二月二十日条）
- 14、於講堂、可被行維摩会、仍年内可造畢之由、長者結構、仍金堂已下事（同上治承五（1181）年三月二十一日条）

「結構」は「仮仏殿」と「講堂」を造り掩ったり造り畢わったりすると同時に計画もしたりすることを示す。亦、次の例のように、建造物に止まらず抽象的なものや具象的なものを調べたり用意したりするような意味の「結構」もある。

- 15、去年冬、教長入道結構和歌合、件判者、彼朝臣也（同上承安三（1179）年三月二十一日条）
- 16、明日於建春門院可有和歌会云々、隆季実定卿等結構云々（同上嘉応二（1170）年十月十三日条）
- 17、抑及（毬）打之会、勝遊之始也、少人殊有結構、

諸僧各蒙招引（『垂髮往来』238②）

18、勝長寿院一切経会、結構舞楽、羽林出御（『吾妻鏡』正治二（1200）年六月十五日条）

19、於御所人々取孔子致経営、結構引出物等云々（同上嘉禄元（1225）年三月二十一日条）

以上のように、和歌会、毬打会、舞楽、引出物を計画或いは準備したりしたことを示している「結構」も存在した。以下の例は見事な装飾、食事等について趣向を凝らして拵えたりするというような意味の「結構」となる。

20、加之、非調菜羹於周備之味、多加菓種於唐様之膳、連々結構、日々倍增（『鎌倉遺文』23363条）
「周備之味」と「唐様之膳」を次々と「結構」する。つまり、拵えたり、用意したりすることを示している。

21、（可停止稻荷、日吉祭、祇園御霊会過差事）仰、馬長馬上之結構、神宝神物之過差或装色々之綾羅、或鏤種々之珍宝（同上4240条）

祇園会に登場する「馬長」と「馬上鉾」の衣装、装飾等としては「色々之綾羅」、「種々之珍宝」というように、着飾られたり、拵えられたりしてあって、あまりにも贅沢なものであるため、「停止」すべきだと訴えている。

22、内女房局女院可御覧由兼披露、每局結構、求美服懸竿、儲厨子置物具（『明月記』二463上⑩）

女院が女房の局を御覧ずる場面となるが、その各々の「局」は「求美服懸竿、儲厨子置物具」というように、見事に設けられ装飾されている。「結構」はきちんと用意したり、調べたりするという意味で用いられている。次の例もいずれも見事、立派に準備、支度する「結構」となる。

23、今日御霊祭也、將軍家於今出河殿、渡物風流、結構異例云々（『吾妻鏡』暦仁元（1238）年八月十九日条）

24、近江入道虚假立御所奉入、御儲結構無比類云々（同上暦仁元（1238）年十月十三日条）

25、是皆御行始之儀也、面々御儲太結構、御引出物及風流云々（同上寛元元（1243）年正月五日条）

26、馬場之儀結構同去年、希代壯観也（同上寛元三（1240）年八月十六日条）

かかる立派な趣向、仕組、装飾等を設えたり、拵えたりするというような意味の「結構」に対して、この時代の古記録では下記の例のように上述した（三）「好ましくないことの企て、働き」というマイナス的な意味として用いられている「結構」の方が

前の時代と同じく依然として圧倒的に多く、中心的な役割を果たしていると言えよう。これは『鎌倉遺文』における310例の中で（三）のマイナス的な意味の「結構」が272例に達していることから示唆される。のみならず、「結構」する好ましくない事柄も下記の例の如く「狼藉、悪事、乱行、欲奪寺領、無道、乱妨、殺人」などといった多様化傾向をも見せている。

27、長忠五師以下梟悪之輩、所令結構狼藉也（『鎌倉遺文』3658条）

28、若雖非自身他寺僧等、衆議結構悪事之条（同上2481条）

29、入箆兇徒等於住宅、兼結構乱行云々（同上1644条）

30、還欲奪寺領、結構之旨罪科弥重（同上1206条）

31、上人讓状旨、永停松沢入道無道結構（同上2466条）

32、須彼寺之無道、結構四人殺害之時（同上6303条）

次の「結構」は上接文の「魔界、邪魔波旬」と参考例から推して悪魔の計略かまたは仕業というようなことを表すと思われる。

33、もしこれ祖神の御計歟、怨霊のかまへか、魔界の結構か、疑給はし（同上6723条）

34、明時御政、忽難變哉、誠是邪魔波旬之結構也（同上3536条）

Cf 衆徒の濫悪を致すは魔縁の所行なり（『覚一本平家物語』巻二138⑩）

次の「結構」は悪人と手を組む。いわば出自の中国語の意味（三）「結託」という意味で用いられているように見える。

35、此又偏に、弘法、慈覚、智証等の三大師の法華経誹謗の科と、達磨、善導、律僧等の一乗誹謗の科と、此等の人々を結構せさせ給国主の科と、（『鎌倉遺文』14417条）

36、内裏盗人結構法師事（『玉葉』建久二（1191）年五月十八日条）

亦、前の時代には見られなかった「御結構」という語形態も登場して、日本語との同化振りが浮き彫りになっている。

37、是偏奉為大明神御結構事也（『鎌倉遺文』5213条）

38、是偏法皇御結構云々（『玉葉』承安三（1173）年六月十一日条）

39、此新殿下ハ全非御懇望、非御結構（同上文治二（1186）年六月八日条）

「御」と「結構」との結合でその行為をなす者に対して敬意を表しているが中国文献には斯様な用法が存していない。

以上、具体例を挙げて鎌倉時代の漢文における「結構」の意味用法について考察してきた。前の時代と比べて使用量の増加に伴い、「結構」の対象としては一層多様多彩の様相を見せたため、意味用法としても多様化、具象化の傾向が表れており、「用意、支度」という意味には工夫、趣向を凝らしてその物事を見事、立派に拵えたり、調べたりするというような含みも付随していると思われる。これは出自の中国語における創意工夫をして建物を見事、立派に組み立てるという意味特徴と一脈相通じるものであると言えよう。

以下、鎌倉時代の和漢混淆文における「結構」について検討してみよう。

1、末世の愚人、いたづらに堂閣の結構につかることなかれ、仏祖いまだ堂閣をねがはず。自己の眼目いまだあきらめず、いたづらに殿堂精藍を結構する、まったく諸仏に仏字を供養せんとにはあらず、おのれが名利の窟宅とせんがためなり。（『正法眼蔵』行持下）

二つの「結構」はその連体修飾語「堂閣」と対象の「殿堂精藍」という建築物から本来の中国語の意味を踏襲して建立するということを示していると考えられる。つまり「末法の世に生きる愚かな人間は、徒に立派な建物の建立のため疲労困憊してはならない。仏祖は立派な建物を願わなかった。自己の法の眼を明らかにせず徒に立派な寺院を建立しようとする者は、全く諸仏に仏の家を供養しようというのではなく、それを自分の名利の住み家にしようとしている」と解される。

2、サレバ何科怠ニヨリテ、当家可減御結構アリケルヤラム、サレドモ微運、尽ザルニヨリテ、此事頭テ迎申タリ。日来、御結構、次第今直承候ベシト、（中略）、成親卿ヲ始トシテ、俊寛ガ鹿谷坊ニテ平家、減スベキ結構、次第、法皇ノ御幸、康頼ガ答返（『延慶本平家物語』第一末 22 オ①）

2'、何の遺恨をもて此一門ほろぼすべき由。御結構は候けるやらん。（中略）。然共当家の運命つきぬによって、むかへ奉またり。日来の御結構の次第、直に承らむとぞの給ひける。（『覚一本平

家物語』卷二 157 ⑥）

Cf 此一門ほろぼすべき由の結構は候ひけるやらん。（中略）しかれども当家の運命つきぬによって、むかへ奉たり。日比のあらましの次第、直に承らんとぞ宣ひける（日本古典文学全集『平家物語』）

上記の「日来の御結構」は計画、企てというような意味で用いるが、一方参考例のように、同じ場面において他の写本では「結構」の代わりに「あらまし」と記されていることが分かる。つまり、「結構」は「あらまし」と同じ意味を示している。下記の「結構」はサ変動詞として、計画する、企てることを示す。

3、尋根元、義伸結構、悪心（『延慶本平家物語』第四オ③）

「結構」は上述した同時代の古記録の「悪事、狼藉」等と同様、マイナスの意味の「悪心」という対象と共起してそれを企てることとなる。次の「結構」は異本にある「所為」と同じかまたはそれに近い意味として用いられるかと思われ、かかる「結構」は前掲した古記録にも表れている。

4、偏是所天魔結構、歎（同上 53 ウ⑧）

4'、誠是魔縁之結構（『源平盛衰記』470 ③）

Cf 是偏に天魔の所為とぞみえし（『覚一本平家物語』卷一 123 ⑨）

亦、古記録と同様、下記の例のように、「結構」は具体的な物ではなく、「舞楽」というような娯楽の対象となりそれをよく整えたり、見事に仕上げたりする。

5、舞楽結構シテ童舞ナレバ珍き事ニテ、殊ニ見物ノ男女多カリケリ（『沙石集』六ノ五 265）

次の「結構」は前掲した名詞またはサ変動詞としての例と異なり、明らかに形容動詞として用いられている。換言すれば、新たな品詞性が獲得されて登場するようになった。

6、あるとき、しうちまへに飯をけつこうにすへ、悪源太の前には無業の飯をすへたり（『金刀比羅本平治物語』下 268 ⑥悪源太誅せらるる事）

6'、或時主ガ前ニハ飯ヲ結構シテ居（据）、悪源太ノ御前ニ閣御前ニ候無斎（業）ノ飯ヲ取（『半井本平治物語』下巻 19 オ④）

6'、或る時、須智ガ前には飯を結構して供へ、悪源太の前には無業の飯を据ゑたり（『陽明文庫蔵本平治物語』下巻 532 ③悪源太誅せらるる事）古態本と分類される半井本と陽明文庫蔵本にある

サ変動詞としての「結構して」に対して、流布本系と称される金刀比羅本においては「結構に」という形態で「据へる」を修飾し、明らかに形容動詞として用いられてプラスの評価の意味を示している。つまり「自分の前に膳を立派に添えて悪源太の前におかずの付いていない粗末な飯を置く」と解されるが、一方「結構して」は立派な膳を用意して添えるというように、見事、立派という含みを伴っているが「用意」という意味も依然として残っている。但し「結構に」はそれと違って原義である「用意」が捨象されて、「立派」という意味だけとなり、後接の「据へる」を連用修飾している。この「結構に」からも『金刀比羅本平治物語』が室町時代以降と思しき後出本であることが示唆される。このような写本年代の新旧によって「結構」の意味を異にするのみならず、下記の例の如く、他の表現から「結構」の意味判断にも役立つことになる。

7、(是は法皇の山攻めらるべき事) ないきよげなる布衣たをやかにきなし、あざやかなる車にのり、侍三四人めしぐして、雑色牛飼に至るまで、つねよりも引つくろはれたり(『覚一本平家物語』巻二 153 ⑧)

Cf、法皇の比叡の山を攻めさせられうとあるを申し止むるために呼ばるとお心得あって結構な車に乗り侍三四人連れて(『天草版平家物語』24 ④)

同じ場面において覚一本では「あざやかな車」に対して、天草版では「結構な車」と表現されているが、「結構」は明らかに「あざやか」と同じ意味用法として用いられて、プラス評価の意味合いを表しているのである。

以上、鎌倉時代の文献における「結構」について

文章ジャンルを分けて考察をおこなってきたところ、その意味用法として基本的に前の時代の用法を踏襲していると判明したが、新たな「御結構」という日本語の特有の表現形式も登場し、日本語へ同化しつつある側面も浮び上った。亦、上述した和漢混淆文における例6のように「結構に」という形容動詞として用いられる用法も見られ、一例のみであるが立派、見事というプラスの評価意味となるのも明白であろう。かかる意味はほかでもなく意趣、工夫を凝らして仕組んだり設えたりするといったような含意がその発生源となると考えられよう。とはいえ見事、立派というプラス評価意味として定着したのは次の室町時代になってからである。右の考察を通して、鎌倉時代の文献における「結構」の意味は次のように記述、帰納できよう。

- 一、建物等を組み立てること。また、建物などの組み立て、仕組み、構造。
- 二、文章や書等を構想すること。また、文章や書などの組み立て、形態。
- 三、好ましくないことの企て、働き等。
- 四、物事の仕組み、計画。

平安時代と同様、四つに大別できるが、残りの「結構」については検討を加えたところ、いずれも右の分類に入ることができると分かった。鎌倉時代文献における「結構」の意味の分布状況は次の表3のようになっている。亦、表3から以下のことが考えられる。

表3の意味分布に依れば、鎌倉時代文献では、漢文といい和漢混淆文といい、中国語を受容した(一)と(二)の意味用法は少量でありながら依然として存在してはいるが、その使用量は明らかに前の時代

表3

計	文献	結		構		文章ジャンル
		意味				
		一、建物等を組み立てること。また、建物などの組み立て、仕組み、構造。	二、文章や書等を構想すること。また、文章や書などの組み立て、形態。	三、好ましくないことの企て、働き等。	四、物事の仕組み、計画。	
62	玉葉	1		33	28	漢
23	明月記			11	12	
7	吉記			4	3	
2	猪隈関白記				2	
14	平戸記	2		7	5	文
4	勘仲記			2	2	
5	高山寺古文書		1	4		

6	高野山文書 (1・4)			4	2	漢文
9	百鍊抄	2		3	4	
310	鎌倉遺文所載文章	12	1	272	25	
51	吾妻鏡			17	34	
18	園大暦			8	10	
3	天台座主記	2			1	
1	雑筆往来				1	
3	垂髪往来				3	
1	貴嶺往来	1				
3	庭訓往来	1			2	
2	尺素往来				2	
4	異本十二月往来				4	
1	十二月消息				1	
2	南都往来				2	
1	平治物語				1	和漢混淆文
13	延慶本平家物語			11	2	
14	源平盛衰記			13	1	
4	正法眼蔵	2			2	
1	愚管抄				1	
1	古今著聞集				1	
1	沙石集				1	
3	塵袋				3	
569	合計	23	2	389	155	

を下回っており時代の変化を見せている。一方、平安時代に中心的な存在であった(三)の意味は、鎌倉時代に下っても変わることなく本義となる(一)、(二)の意味はもちろんのこと、(四)の新生した意味をも上回って中心的な働きを成している。尚、その使用状況から見れば(三)の意味用法は『鎌倉遺文』をはじめとする古記録に偏っているが古往来等にはあまり見られない。和漢混淆文においても同じく文章ジャンルによる使用の傾向性を見せている。つまり(三)の意味用法は軍記物に集中しており、その他には殆どその所在が見当たらないようである。以上の分析、考察を通して中国語の工夫趣向を凝らして物事を立派、見事に「結構」するという意味特徴が一貫して継承されているが現代語のような形容動詞として「立派、見事」であることを表すには至っていない。但し、右に挙げた『平治物語』にある「結構に」という形容動詞の連用修飾という用法が見られ、プラス評価の意味として用いられる用例もあった。一例のみであるが次の時代に「結構」の「見事、立派」というプラスの新たな意味が派生する前兆となり、素地でもとも言えよう。以下、室町時代に目を転じて「結構」の意味用法を考察してみる。それに先立って(一)の意味を示す「結構」が不在または減少に伴って生じる意味の空白が如何なる語によって補完されているであろうかについて考えてみ

たい。次の例を挙げて見よう。

- ・ 観音院見中宮御堂造作 (『御堂関白記』寛弘元(1003)年十月十五日条)
- ・ 造作之間臨時工等給禄、大工則季馬給之 (『後二条師通記』寛治六(1092)年六月二十三日条)
- ・ 慈徳寺見作造 (同上長保元(999)年八月十六日条)
- ・ 伊豆国北條内、被企伽藍堂作 (『吾妻鏡』文治五(1189)年六月六日条)
- ・ 件所世毫法師日来造堂 (『高野山文書』四468①)
- ・ 新宮ノ衆徒等一味同心シテ城郭ヲ構テ相待ケリ (『延慶本平家物語』第二中24オ①)

「造作、作造、堂作、造堂、構ふ」等のような語が「結構」の(一)の意味と類似して、「結構」の不在や消長によって生じる意味領域の空白を補足することになると看取される。

IV -3. 室町時代以降の「結構」

室町時代の文献における「結構」の意味用法について用例を挙げて考察してみよう。先ず『邦訳日葡辞書』に収録されている「結構」を見るとその意味用法について全部項目を立てて下記のような注釈を加えている。

Qeccô. ケッコウ (結構) Musubi, camayuru. (結び、構ゆる) 何か物事の準備をすること、あるいは備えること。例, Monouo qeccô suru. (物を結構する)
 ♪ また立派で華やかな物を見事に整えて飾ること。

(479 頁以下同)

Qeccôgaraxe, suru, eta. ケッコウガラセ, スル, セタ (結構がらせ, する, せた) 褒められようと思つて, 物を見せたがる, あるいは誇示したがる。

Qeccôna. ケッコウナ (結構ナ) よく整えてあったりして, 立派であったり, 美しかったりする (こと)。Qeccôni. (結構に) Qeccôsa. (結構さ)。

Qeccôxa. ケッコウシャ (結構者) すなわち Qeccônafito. (結構な人) すぐれた人。

と上記にあるが如く、用法としては前の時代に見えなかった「結構がらせ, する, せた」と「結構者」というものが新たに登場してきた。一方、意味として注釈に出ている最初の意味項目は明らかに前の時代に意味分類されている本義 (一) (二) 及び (四) を踏襲しているが、中心的な存在としての (三) については全く収録されていない。つまりマイナス的な意味用法は姿を消したように見えるが、下記の室町時代の文献にある用例の示すようにそれらはまだ生き延びている。他方、鎌倉時代の文献にプラス評価の意味としてかろうじて一例のみ見えた「結構」は形容動詞として完全に形成されたのと共に、「立派、見事」というプラス意味も確立するようになったと言ってよい。のみならず「結構がらせ, 結構者」などのような鎌倉時代までには見られなかった新たな用法も生まれた。『邦訳日葡辞書』において斯様な意味注釈はいうまでもなく下記のような室町時代の文献にそのような具体例が存在してはじめて可能となったであろう。

それでは鎌倉時代までには見られなかった新たな意味用法について更に考察してみたい。まず、前の時代に用いられた (一)「建物等を組み立てること。また、建物などの組み立て、仕組み、構造」という意味を表す用例を挙げてみよう。

1、宮殿ヲ結構シ、美人ヲタクワユル事ヲ諷シタゾ (『三体詩抄』一ノ二)

2、諸方ソトハノケッコウ事尽了、大曼陀ラ供 (『多聞院日記』天正十二(1584)年十月二十日条)

3、五尺ノ仏ヲ耳カニスル譬ソ、セントコシラエテ結構セウトシタレハ (『莊子抄』238 ④)

次の例は少量ながら鎌倉時代の文献に使われている意味分類の (二) に近い意味としての「結構」と解される。

4、越州ヨリ宗喜・教浄帰了、雖無一途ケッコウノ返事也 (同上十一月五日条)

文章ではないが、返事が整ったり筋が通ったりすることを表している。次の「結構」は上掲した (三) 好ましくないことを企てたりするという意味で用いられている用例であろう。

5、又語云、宇治 平等院領カワラノ庄 大閣 良基公可没収之由、及結構之間、寺官等数十人上洛、雖嘆申、不承引云々 (『後愚昧記』応安五(1372)年九月二十八日条)

6、諸大名等可退治彼朝臣之結構等有之 (同上康暦元(1379)年二月二十日条)

尚、鎌倉時代の文献にある (四) の意味としての「結構」も見られる。

7、籩豆ノ器ヲ結構するハ、小事ヲ務ル也 (『応永二十七年本論語抄』362 ⑧)

8、我等がやうなる福伝にいかにもお仏供を結構して (『狂言記』福の神 342)

例7は宗廟を祭祀するためのお供えの器物である「籩豆」を、例8は「お仏供」を用意したり、調べたりすることを表している「結構」となる。以下に列挙する「結構」はいずれも形容動詞として「立派、見事」という意味用法の例であろう。

9、子 - 華カ結構ニシテアルカハ、不孝ノ者也 (『応永二十七年本論語抄』269 ④)

10、御面像スケナク見ヘテ、結構ニ綵色タルヲ拜之、殊勝々々 (『多聞院日記』天正八(1580)年十一月十三日条)

11、鼎<ヲ>五ツ立テ、色々ノ結構ナルクイ物ヲサセテクウ<ヲ> (『湯山連句抄』47ウ①)

12、門ヨリ中へ入ツ出ツルホドノ者ハ何タルケツコウナ宝デモアレ (『句双紙抄』3ウ③)

13、結構に船を飾り舞楽を奏し、糸竹を調べ (『エソボのハブラス』31 ⑱)

14、ある馬に一段結構な鞍を置き、花やかにしてさいて通るに (同上 59 ○ 22)

15、結構な者也 (中略) 宝也 (『杜詩統翠抄』九 37ウ③)

16、又其次に、結構な蒔絵の重箱に色々のを入て持て出ました (『狂言記』菊の花 375)

17、結構にできました、則仏を負ふて下りませう (同上金津地蔵 299)

次の例は古記録に見られている「結構」であるが連体修飾として用いられて、上記の形容動詞としての「結構な」と同じく「立派、見事」という意味を表している。

18、抑御進物蠟燭令執進候了、被遣書候之間、目出候、結構之蠟燭にて候程に(中略)悦喜無申計候(『高野山文書』一嘉慶元(1387)年540^⑫)御進物としての「蠟燭」を執進し終わった場面であり「結構」は、その御進物である「蠟燭」を修飾することと後接文の御進物に対して「悦喜無申計候」の意味とを併せて考えれば、よく整えられて用意されていた、というよりも寧ろ立派、綺麗という意味で用いていると理解されるのが妥当で、素晴らしい「蠟燭」の御進物でこの上なく喜ぶと解される。次の「結構」も同様である。

19、参伏見殿、候御読、自宮御方御葩_五被_レ下_レ了、結構之物驚目畏入者也(『康富記』嘉吉二(1442)年八月十二日条)

「候御読」のご褒美として宮御方より御葩(花形の金具)五つを「被_レ下_レ了」という場面であろう。「結構之物」の「物」とはいうまでもなく五つの御葩であって、素晴らしい贈物であることは想像に難くない。「結構」はその修飾する「物(御葩)」と、それによつての「驚目畏入」という驚喜の心情を吐露するというような後接文とを考え合わせると、(よく作られて)見事、立派という意味で用いられていると解されるであろう。つまり素晴らしい物(御葩)で「驚目畏入」となったのである。次の『康富記』に見える「結構」も同様に使用されていると考えられる。

20、談論語序了、給暮食後退出了、御懺法之葩二被與了、結構之物也(同上嘉吉二(1442)年七月三日条)

V. 結び

以上、日本文献における「結構」の意味用法を巡ってその出自となった中国語との比較を行いつつ考察してきたところ、次のような諸点が判明した。1. 結構は漢語という「素姓」のためすぐ和文には浸透せず、しばらくの間漢文と和漢混淆文にのみ用いられ、仮名を中心とした和文には用いられていないなど文章ジャンルによる使用上の隔たりが認められておりすべての文章ジャンルに使われていた中国文献と好対照を成す。尚、文章ジャンルによる差異は使用の有無に限らず意味の上にも反映されている。2. 即ち「結構」は同じ漢文でありながら漢詩文では中国語の意味をそのまま受容して用いられているのに対し

て、古記録では本来の意味を継受しつつ、中国文献には見られなかった「物事の仕組み、計画」という新たな意味を包有するようになった、といったような異同を見せている。3. 更に時代による使用上と意味上の違いも表れている。平安時代と比べて鎌倉時代ではマイナスの意味の「好ましくないことの企て、働き等」は使用頻度が最多となり、マイナスの語感が中心となり、その存在が一層際立ってきた。平安時代では本来の意味(建造する)が変化した意味(抽象的な「組み立て」)より多用されているが、鎌倉時代に下るとマイナスの意味の使用が増え、両者の使用量が逆転するという変化が起きたのである。尚、日本文献における「結構」の意味変化を来した要因と言え、本来の意味と変化の意味との間に「工夫を凝らす」という類似性が共存しているためである。斯様な言語内部の関連性を土台に連想して工夫を要する「物事の仕組み、計画」という意味を誕生させたのであろうと考えられ⁹、いわば「意味的有契性(有縁性)」¹⁰に因る転義と言つてよいのではないか。また、かかる意味変化の生じた文章ジャンルは所謂純漢文ではなく、日本人の手によって作成され、日本の内容が記された古記録類という和化漢文であった。つまり、斯様な日本の内容を専ら記録するためということは意味変化をもたらした言語外部の要因の一つとなろう。亦、既有的「美し、鮮やか、良し」などのような和語とは異なり工夫趣向を凝らすことによって生じる「見事、立派」であることを示差的且つ弁別的に表すためといった要因も考えられる。

更に時代が下がって室町時代になるとプラスの評価としての「見事、立派」という新たな意味が生成、定着し意味の向上というような意味変化が起こった。つまり同じ日本文献とはいえ、時代によって意味の差が存していると思われる。それでは何故建築等の組み立て、仕組み、構造という原意から「見事、立派」というプラス評価の意味が生まれたのか。一つは中国文献における「結構」が名詞と動詞としてだけ用いられることと違い、日本文献では形容動詞としての用法も発生したことと大いに関わるもので、いわば意味変化と新たな用法とは相まった関係にある。

尚、上掲した室町時代の成立と言われる古辞書では前の時代と違って「結構」は「奔走」、「馳走」と類義関係があることが明らかになる。実は「結構、馳走、奔走」という中国の出自となる三語はいずれ

も日本語に入り意味変化が生じたと同時に、その意味変化において共通のメカニズムが根底にあると考えられる。つまり、何かまたは誰かのために力を惜しまずに走り回ったりする「馳走」「奔走」と何か或いは誰かのために考えを巡らしたり、工夫を凝らしたりする「結構」は三者とも「懸命に努力する」という意味特徴が含まれていると言ってよい。それを素地に「馳走」は「懸命に努力する」ことによって出来たものもその行為自体も見事、立派になる。一方「結構」は「懸命に努力する」という行為またはその結果が見事、立派なものになったため、形容動詞的な用法も派生したのであると考えられる。

付記：本稿は欒竹民平成26年度海外長期研修による研究成果の一部であり、平成5年広島大学に提出した博士論文の作成と共に調査した資料を基に執筆したものである。

注

- 1 池上嘉彦『意味の世界』の第五章意味の変化8、意味の向上と墮落（日本放送出版協会、1978.11.20）
- 2 柴田省三『語彙論』英語学大系7、語彙研究の先駆者たち（大修館書店、1975.5.1）
- 3 同上
- 4 佐藤喜代治『日本の漢語』（角川書店、1975.10.20）104頁に解かれている。また、遠藤好英『講座日本語の語彙』（明治書院、1983.4.25）第10巻において「結構」について通時的に考察、その意味変化の過程が明らかにされており、拙稿もこれに負うところが多かった。尚、その内容に関して筆者なりに纏めてみれば下記のように説明出来る。「結構」は中国語出自の漢語として漢文において「家屋又は文章などを組み立てること、かまえ作ること。又そのさま」という意味で用いられて近代に至るまで存続していたと指摘されている。日本文献における初出例として『兵範記』に見えた「結構」の用例が挙げられているが、管見に及んだ日本文献では夙に奈良時代に登場し、続いて平安時代初期の漢詩文や史書などに散見している。当該論文では日本文献における「結構」の意味については出典となる中国語の本来の意味用法を受容する一方、それと異なるもの、つまり「我が国の例の特有の意味」も生じ、「その第一は建物や文章でなく心の中に「結び構える」企てやたくらみ、特に計画の意味である」と言明されている。更に「（上記の例に）代って多くなったのが第二の場合で「準備、用意する」意味の例である。この意味の例も早く記録体の文章に見える」と指摘され、その上、中世以来の「結構」の用意という意味は中古以来の計画の意と違っていると併せて特徴付けられている。尚、「すばらしい」の意味変化は中世以後に記録体、候文以外の文章で起こり「結構」が形容動詞として連用修飾語、連体修飾語として用いられる点が説明されている。
- 5 拙稿「日本語における漢語の意味変化について－「馳走」の統紹－」（『広島国際研究』第22巻、2016）を参照されたい。
- 6 『現代漢語詞典』における「結構」の注釈に依れば、名詞として1、ものの組み合わせ、組み立て、2、建築物の構造、動詞として3、組み立てること。組み合わせること、と記されているが（三）のような意義は収録されておらず現代中国語では既に使われなくなったと言えよう。しかし唐代から元代にかけの文献を中心に編輯された『近代漢語詞典』には（三）の意義が掲載されている。一方、先行研究では「我が国の例の特有の意味の場合である。その第一は建物や文章でなく、心の中に「結び構える」企てやたくらみ、時に計画の場合である」（遠藤好英「けっこう（結構）」、『講座日本語の語彙』（明治書院、1983.4.25）第10巻、26頁）と指摘されているが、その出自である中国語にも「企てやたくらみ」という意味用法として用いられているように思われる。
- 7 今回調べた限りの日本文献における「結構」は初出例として『寧樂遺文』の例となる。一方、『日本国語大辞典』第二版では『小右記』の例を最古とされている。
- 8 小島憲之『上代日本文学与中国文学下』（塙書房、

1993年八版) 1533頁、1539頁

- 9 佐藤喜代治『日本の漢語』104頁(1979年、角川書店)「「結構」という語も建築などの構成について言う動作語であるが、その結構がみごとであるという意味で、「結構な」という、形容語としての用法が生じたと考えられる」と説かれている。また遠藤好英『講座日本語の語彙』(明治書院、1983年)第10巻28頁においても「すでに、「すばらしい」の意味になっている。この意味の変化は中世以後に記録体・候文以外の文章で起こり、「結構」が形容動詞として連用修飾語・連体修飾語として用いられる点に指摘されるのである」と説明されている。
- 10 池上嘉彦『意味論』において「意味的有契性」について「ある語の意味から他の意味が新しく派生される場合、原義と転義との間には後者の派生のきっかけとなった何らかの連想関係が存在しているということから生じてくる」と説かれている。(大修館書店、1993年7版226頁)

調査文献

本稿で調べた中日両国文献は『広島国際研究』第19巻に掲載された拙稿「漢語の意味変化について－「迷惑」の続貂－」を参照されたい。